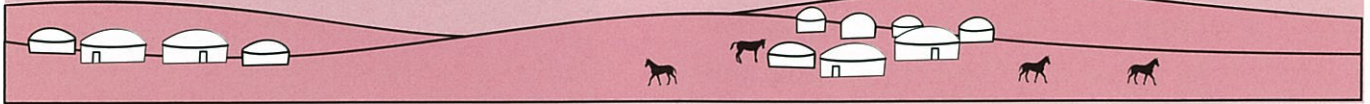




NPO法人  
子どもセンター / パオ

# NewsLetter vol.37

インタビュー「ぴあ・かもみーる」施設長 前田恵子さん●  
子どもシェルター全国ネットワーク会議 in東京●



新春  
INTERVIEW

「ぴあかも・丘のいえ日記」日記⑰

## 子どもたちはがむしゃらに生きようとする エネルギーを持っている



新年の「ぴあかも・丘のいえ日記」はステップハウス「ぴあ・かもみーる」開設時から施設長を務め8年の、前田恵子さんに仕事や子どもたちへの思いを聞きました。

前田恵子さん プロフィール

県職員の保育士として障害児の支援や療育に長く関わった後、一時保護所や児童自立支援施設に勤務。退職後、自立援助ホーム「ぴあ・かもみーる」の施設長に。

— ぴあかもについてどう思いますか。

さまざまなことで傷ついた子どもたちが休憩しながら、半年から1年かけて1人で社会に出て行くための力を蓄える場所。社会に送り出す責任を感じ、力が入ります。

子どもたちが持っているものは1人1人違います。それぞれのペースに合わせ、その子の将来をイメージして支援に結びつけていくことはすごく難しいことです。

— 例えばどういうところが？

子どもたちと関わる時には、自分の価値観を放棄しないと向き合えないと感じます。

ある子は入所したばかりのころ、1枚のお皿にご飯もおかずも全部載せて、手で食べようとしてました。「ご飯はお茶碗でしょ」とたしなめると、その子は「食器をいくつも使って洗いやが増えると、母ちゃんに殴られるんだから」と返してきました。

60年生きてきた価値観は通じないし、逆に何気ない「当たり前」「それが普通」の言葉が子どもたちを傷つけることもたくさんあります。子どもたちに向き合ってその子の実像と触れるとき、自分も裸にならないといけない。人としていろいろそぎ落として「何が大切なのか」を突きつけられます。そのすごさ、醍醐味がぴあかもでの支援にはあります。

— どんな思いで支援されていますか。

子どもたちはそれぞれ、がむしゃらに生きようとするエネルギーを持っている。その子なりにどう生きていけるか、一緒に模索するのが私たちの仕事。支援者として感情は大切です。子どもの悲しみや怒りをその子と一緒に感じられないと支援はできない。でも行動に起こす際には冷静さが必要。パオは子どもたちにパートナー弁護士が2人ずついますが、弁護士としての冷静な対応に学ぶところは多いです。

— 悩むこともありますよね。

長くぴあかもにいた子で、彼女の意に沿う形で旅立ちした子がいましたが、自立した生活はなかなか難しく不安定な状態が続いています。どうやったら幸せな旅立ちができたか。答えは出ないです。

ぴあかもスタッフは基本的に入所している子の支援に集中します。旅立ち後はパートナー弁護士が引き続き関わります。生活が成功した子の話を聴くとうれしい。でも苦しい思いで生活している子の存在を知ると…。

子どもたちの将来や意向を考え出した結論でも必ずしも正解ばかりじゃないことを腹にすえないといけない。スタッフは子どもたちの幸せを願って支援を続けていますが、「これでよし」という支援はありません。

2面へ▶▶▶